

現代中学生の主観的能力と教育アスピレーション

東北大学 鳶島修治

1 目的

本研究では、教育達成の社会経済的格差が生み出されるメカニズムの解明に貢献することを目的に、中学生の教育アスピレーションに対する学業面での主観的能力の影響について検討する。先行研究では、学力テスト等によって客観的に測定された学業達成だけでなく、個人の主観的能力も進路形成に影響を与えることが示唆されている。本研究では、中学生の「がんばればとれると思う成績」（自身の潜在的な能力に関する信念として捉えられる）に着目し、従来の研究とは異なる視点から分析を行う。

2 方法

分析にはベネッセコーポレーションが 2006 年に実施した「学習基本調査」と「学力実態調査」の中学 2 年生のデータを用いる。分析方法としては、中学生の教育アスピレーション（大学進学希望）を従属変数としてロジスティック回帰分析を行う。また、主観的能力の規定要因についても出身背景の効果に着目しつつ検討を加える。主観的能力については成績自己評価（現在の総合的な成績の自己評価）と「がんばればとれると思う成績」（自身の潜在的な能力に関する信念）という 2 つの指標を用いる。出身背景については父親と母親の学歴（大卒ダミー）を用いる。学業達成については「学力実態調査」での共通問題の正答率（国語と数学の平均）を平均 50、標準偏差 10 に標準化した。

3 結果

まず、成績自己評価を従属変数とする重回帰分析を行った結果、客観的な学業達成を統制した上でも父親の学歴（大卒ダミー）が成績自己評価に対して有意な正の効果をもつことが示された。また、「がんばればとれると思う成績」を従属変数とする順序ロジット分析の結果として、客観的な学業達成や成績自己評価を統制した上でも母親の学歴（大卒ダミー）が有意な正の効果をもつことが示された。そして、教育アスピレーション（大学進学希望）を従属変数とするロジスティック回帰分析の結果、学業達成と独立に成績自己評価が有意な正の効果をもつこと、学業達成および成績自己評価とは独立に「がんばればとれると思う成績」が有意な正の効果をもつこと、学業達成、成績自己評価、「がんばればとれると思う成績」を考慮した上でも父母の学歴が有意な正の効果をもつことが示された。

4 結論

以上の分析結果は、中学生の教育アスピレーション（大学進学希望）に対して、客観的な学業達成とは独立に、成績自己評価や「がんばればとれると思う成績」という形で測定された主観的能力が影響を与えていることを示唆する。また、中学生の主観的能力が（学業達成を介した間接的な影響だけではなく）出身背景（親の学歴）によって直接左右される側面もあることが示された。ただし、中学生の主観的能力は教育アスピレーションに対する出身背景（親の学歴）の影響を十分に説明せず、主観的能力による媒介を考慮した上でも出身背景の直接効果が残る。したがって、出身背景が教育アスピレーションに影響を与えるメカニズムについては他の要因を考慮した検討を進めていく必要がある。

付記

本研究は JSPS 科研費（研究課題番号：25885007）による研究成果の一部である。二次分析を行うにあたって、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「第 4 回学習基本調査・学力実態調査、2006（寄託者：ベネッセコーポレーション）」の個票データの提供を受けた。記して感謝いたします。